

忠直卿行状記

菊池寛

青空文庫

家康いえやすの本陣へ呼び付けられた忠直ただなおきよう卿の家老たちは、家康から一たまりもなく叱り飛ばされて散々の首尾であつた。

「今日井伊いゐとうしやう藤堂ぜいの勢が苦戦したを、越前えちぜんの家中之者は昼寝でもして、知らざつたか、両陣の後を詰めて城に迫らば大坂の落城は目前であつたに、大將は若年なり、汝らは日本一の臆病人ゆえ、あたら戦を仕損じてしもうたわ」と苦り切つて罵つたまま、家康はつと座を立つてしまった。

国老の本多ほんだ富正とみまさは、今日の合戦の手に合わなかつたことについては、多少の言い訳は持ち合わせて行つたのだが、こう家康から高飛車に出られては、口を出す機会さえなかつた。

で、仕方がないというよりも、這々ほうほうの体ていで本陣を退つて、越前勢の陣所へ歸つて来たものの、主君の忠直卿に復命するのに、どう切り出してよいか、ことごとく当惑した。

越前少将忠直卿は、二十一になつたばかりの大將であつた。父の秀康ひでやすきやう卿が慶長十二

年閏四月に薨^{こう}ぜられた時、わずか十三歳で、六十七万石の大封を継がれて以来、今までこの世の中に、自分の意志よりも、もつと強力な意志が存在していることを、まったく知らない大将であつた。

生れたままの、自分の意志——というよりも我意を、高山の頂に生いたった杉の木のように轟^{ちくちく}々と沖^ひらしている大将であつた。今度の出陣の布令が、越前家に達した時も、家老たちは腫れ物に触るように恐る恐る御前にまかり出でて、

「御所様から、大坂表へ御出陣あるよう御懇篤な御依頼の書状が到着いたしました」と、言上した。家老たちは、今までにその幼主の意志を絶対のものにする癖がついていた。

それが、今日は家康の叱責を是非とも忠直卿の耳に入れねばならない。生れて以来、叱られるなどという感情を夢にも経験したことのない主君に対して、大御所の激しい叱責がどんな効果を及ぼすかを、彼らは恟^{きよう}々として考えねばならなかった。

彼らが帰つて来たと聞くと、忠直卿はすぐ彼らを呼び出した。

「お祖父様は何と仰せられた。定めし、所労のお言葉をでも賜わつたであろう」と、忠直卿は機嫌よく微笑をさえ含んできいた。そうきかれると、家老たちは今さらの如く狼狽した。が、ようやく覚悟の臍^{ほぞ}を決めたと見えて、その中の一人は恐る恐る、

「いかにお思召し違いにござります。大御所様には、今日越前勢が合戦の手に合わざったを、お怨みにござります」といったまま、色をかえて平伏した。

人から非難され叱責されるという感情を、少しも経験したことのない忠直卿は、その感情に対してなんらの抵抗力も節制力も持っていなかった。

「えい！ 何という仰せだ。この忠直が御先を所望してあつたを、お許されもせいで、左様な無体を仰せらるる。所詮は、忠直に死ぬ！ というお祖父様の謎じや。其方たちも死ぬ！ 我也死ぬ！ 明日の戦いには、主従挙つて鋒鏑に血を注ぎ、城下に戸を晒すばかりじゃ。軍兵にも、そう伝えて覚悟いたさせよ」と叫んだ忠直卿は、膝に置いていた両手をぶるぶると震わせたかと思うと、どうにも堪らないように、小姓の持っていた長光の佩刀を抜き放つて、家老たちの面前へ突きつけながら、

「見い！ この長光で秀頼公のお首をいただいて、お祖父様の顔に突きつけてみせるぞ」と、いかと思うと、その太刀を二、三度、座りながら打ち振った。まだ二十を出たばかりの忠直卿は、時々こうした狂的に近い発作にとらわれるのであつた。

家老たちも、御父君秀康卿以来の癩癩を知っているために、ただ疾風の過ぎるのを待つように耳を塞いで突伏しているばかりであつた。

元和元年五月七日の朝は、数日來の陰天名残りなく晴れて、天色ことのほか和清であつた。

大坂の落城は、もう時間の問題であつた。後藤又兵衛、木村長門、薄田隼人生ら、名ある大將は、六日の戦いに多くは覺悟の討死を遂げてしまつて、ただ真田左衛門や長曾我部盛親や、毛利豊前守などが、最後の一戦を待っているばかりであつた。

將軍秀忠は、この日寅の刻に出馬した。松平筑前守利常、加藤左馬助嘉明、黒田甲斐守長政を第一の先手として旗を岡山の方へと進めた。

家康は卯の刻、輿にて進發した。藤堂高虎が来合わせて、

「今日は御具足を召さるべきに」というと、家康は例のわるがしこそうな微笑を洩しながら、

「大坂の小倅を討つに、具足は不用じやわ」といつて、白袷に茶色の羽織を着、下括りの袴を穿いて手には弘子を持つて絶えず群がつてくる飛蠅を払っていた。内藤掃部頭正成、植村出羽守家政、板倉内膳正重正ら近臣三十人ばかりが輿に従つて進んだ。

本多 佐渡守正純さどのかみまさずみは、家康と寸も違わぬ服装で、山輿に乗って家康の後に、すぐ引き添うた。

見ると、岡山口から天王寺口にかけて、十五万に余る惣軍は、旗差物を初夏の風に翻し、兜の前立物を日に輝かし、隊伍を整え陣を堅めて、攻撃の令の下るのを今や遅しと待っていた。

が、攻撃の令は容易に下らないのみか、御所の使番が三騎、白馬を飛ばして、諸陣の間を駆け回りながら、

「義直よしなお、頼宣よりのぶの両卿を、とりかわせ給うにより、先手軍いくさを始めることしばらく延引し、馬をば一、二町も退け、人々馬より下り、槍を手にし重ねての命を待つべし」と、触れ渡った。

家康も、今日を最後の手合せと見て、愛子の義直、頼宣の二卿に兜首の一つでも取らせたいという心があつたのだろう。が、この布令をきいた気早の水野勝成みずのかつなりは、使番を尻目にかけてながら、

「はや巳みの刻に及び候。茶臼山の敵陣次第にかさみ見えて候。速かに戦いを取り結びて然るべし、と大御所に伝えよ」と怒鳴った。が、この二人の使番が引き取ったかと思うと、

再び四騎の使番が惣軍の間を縦横に飛び違つて、

「方々、合戦をとりかくべからず、しずかに重ねての令を待つべし」とふれ渡った。

しかし、昨夜の興奮を持ち続けて、ほとんど不眠の有様で、今日の手合せを待っていた

わが越前少将忠直卿は、かかる布令を聞かばこそ、家老吉田修理よしだしゆりに真つ先かけさせ、国老

の両本多をはじめ、三万に近い大軍を、十六段に分け、加賀勢の備えたる真ん中を駆け抜

け、加賀勢の怒り止むるに答えず、無二無三に天王寺の方、茶白山の前までおし詰め、こ

この先手本多いずものかみただとも出雲守忠朝の備えより少し左に、鶴翼かくよくに陣を張った。

この時初めて、將軍から、

「城兵は寄手よせてを引き寄せて、夜を待つように見え候、早く戦いを令すべし」と、いう軍令が諸陣の間にふれ渡された。

が、忠直卿は軍令の出ずるのを待つてはいなかった。本多忠朝の先手が、二、三発敵にさぐりの鉄砲を放つと、等しく越前勢たちまち七、八百挺の鉄砲を一度に打ち掛け、立ち籠めた煙の中を潜つて、十六段の軍勢林の動くがごとく、一同茶白山に打つてかかった。

青屋口から茶白山にかけての軍勢は、真田左衛門尉幸村さえもんのしょうゆきむら父子、少し南に伊木七郎右衛門遠雄えんとお、渡辺内蔵助くらのすけたす、大谷大学吉胤よしたねらが固めて、総勢六千をわずかに出ている

に過ぎなかった。

ことに越前勢は目に余る大軍なり、大将忠直卿は今日を必死の覚悟と見えて、馬上に軍配を捨てて大身の槍をしごきながら、家臣の止むるをきかず、先へ先へと馬を進められた。

大將がこの有様であるから、軍兵ことごとく奮い立って、火水になれと戦ったから、越前勢の向うところ、敵勢草木のごとく靡なびき伏して、本多伊予守忠昌いよのかみただまさが、城中にて撃剣の

名を得たる念流左太夫ねんりゆうさだゆうを討ち取ったをはじめとし、青木新兵衛、乙部九郎兵衛、萩田主馬ゆめ、豊島主膳等とよしましゆぜん、功名する者数多あまたにて、茶臼山より庚申堂こうしんどうに備えたる真田勢を一氣

に斬り崩し、左衛門尉幸村をば西尾仁左衛門にざえもん討ち取り、御宿越前みしゆくえちぜんをば野本右近うこん討ち取り、逃ぐる城兵の後を慕うて、仙波口より黒門へ押入り旗を立て、城内所々に火を放った。

敵の首を取る三千六百五十二級、この日の功名忠直卿の右に出ずるはなかった。

忠直卿は茶臼山に駒を立てていたが、越前勢の旗差物が潮のように濠を塞ぎ、曲輪くるわに溢れ、寄手の軍勢から一際鋭角を作って、大坂城の中へ楔くさびのごとく食い入って行くのを見ると、他愛もない児童のように鞍壺くらつぼに躍り上よろこって欣んだ。

先手の者が馳せ帰って、

「青木新兵衛大坂城の一番乗り仕って候」と注進に及ぶと、忠直卿は相好を崩されながら、

「新兵衛の武功第一じゃ——五千石の加増じやと早々伝えよ」と、勇み立とうとする乗馬を、乗り静めながら狂気のごとくに叫んだ。

武将として何という光栄であろう。寄手をあれほどに駆け悩ました左衛門尉の首を挙ぐるさえあるに、諸家の軍勢に先だつて一番乗りの大功をわが軍中に収むるとは、何という光栄であろうと、忠直卿は思った。

忠直卿は家臣らの奇跡のような働きを思うと、それがすべて自分の力、自分の意志の反映であるように思われた。昨日祖父の家康によつて彼の自尊心に蒙らされた傷が、拭い去られたごとく消失したばかりでなく、忠直卿の自尊心は前よりも、数倍の強さと激しさを加えた。

大坂城の寄手に加わっている百に近い大名のうち、功名自分に及ぶ者は一人もないと思うと、忠直卿は自分の身体が輝くかと思うばかりに、豊満な心持になっていた。が、それも決して無理ではない。驍^{ぎょうゆう}勇^{ゆう}無双の秀康卿の子と生れ、徳川の家には嫡々の自分であると思うと、今日の武勲のごときは当然過ぎるほど当然のように思われて、忠直卿は、得々たる感情が心のうちに洶^{きょうゆう}湧^{ゆう}するのを制しかねた。

「お祖父様は、この忠直を見損のうておわしたのじゃ。御本陣に見参してなんと仰せられ

るかきこう」と、思いつくと、忠直卿は岡山口へ本陣を進めていた家康の膝下^{しつか}に急いだのである。

家康は牀几^{しょうぎ}に倚つて諸大名の祝儀を受けていたが、忠直卿が着到すると、わざわざ牀几を離れ、手を取つて引き寄せながら、

「天晴^{あっぱれ}仕出^{あっぱれ}かした。今日の一番功ありてこそ誠にわが孫じゃぞ。御身の武勇^{もろこし}唐^{はん}の樊噲^{かい}にも右^{みぎ}勝^{まさ}りに見ゆるぞ。まことに日本樊噲とは御身のことじゃ」と、向う様に褒め立てた。

一本気な忠直卿は、こう褒められると涙が出るほど嬉しかった。彼は同じ人から昨日叱責された恨みなどは、もう微塵も残つていなかった。

彼はその夜、自分の陣所へ歸つて来ると、家臣をあつめて大酒宴を催した。自分が何よりも強く、誰人^{だれびと}よりも勝つて、祖父家康の賞め言葉の「日本樊噲」という言葉が、まだ物足りぬようにさえ思われ出した。

彼は大坂城がまったく暮れてしまった空に、まだところどころ真紅に燃え盛っているのを見ながら、それを今日の自分の大功の表章として享樂しながら、しきりに大杯を重ねるのであった。

得意な上ずった感情のほかには、忠直卿の心には何物も残っていなかった。

越えて翌月の五日に城攻めに加わった諸侯が、京の二条城に群参した時に、家康は忠直卿の手を取りながら、

「御身が父、秀康世にありしほどは、よく我に忠孝を尽くしてくれたるわ、汝はまたこのたび諸軍に優れし軍忠を現したること、満足の至りじや。これによつて感状を授けんと思えど、家門の中なればそれにも及ぶまい。わが本統のあらん限り、越前の家また磐石のごとく安泰じや」といいながら、秘蔵の^{はつはな}初花の茶入を忠直卿に与えた。忠直卿はこの上なき面目を施して、諸大名の列座の中に自分の身の燦として光を放つごとく覺えた。彼は天下に欠くるものもないようなみち足りた感情が、胸のうちにむずむずと溢れてくるのを覺えた。元より彼の意志がなんらの制限を蒙らず、彼の感情が常に豊満していることは、決して今に始まったことではなかった。幼年時代からも、彼の意志と感情とは外部からはなんらの抑制も被らず、思うままに溢れていたのであった。彼は今までいかなることに与^{たずさ}わつても人に劣り、人に負けたという記憶を持っていなかった。幼年時代に破魔弓^{はまゆみ}の的を競えば、勝利者は必ず彼であった。福井の城下へも京の公卿^{くげ}が蹴鞠^{けまり}の戯れを伝えて、それが城中にもしばしば行われた時、最も巧みに蹴る者は彼であった。囲碁将棋^{すしろうく}双六^{すいろく}というも

てあそびものにおいても、彼は大概の場合勝者であつた。元より弓馬槍劍といったような武士に必須な技術においては、彼の技量はたちまちに上達して、最初同格であつた近習たちをぐんぐん追い越して、家中においてその道に名誉の若武者たちにも、たちまちに打ち勝つほどの上達を示すのを常とした。

こうして、周囲の者に対する彼の優越感情は年と共に培われて来た。そして、自分は家臣共からはまったく質^{たち}の違つた優良な人格者であるという確信を、心の奥深く養つてしまつたのである。

が、忠直卿の心には、家中の人間の誰よりも立ち勝っているという確信はあるものの、今度大坂に出陣して以来は、功名を競う相手は、自分と同格な諸大名であるので、もしや自分が彼らの何^{なんびと}人かに劣つてはいはしまいか、ことに武将としては最も本質的な職務たる戦争において、思わざる不覺を取りはしまいかと、少しく憂慮を懷かぬわけにはいかなかった。果して五月六日の手合せには、ついに出陣の時刻を遅らせたために、思わぬ不覺を取つて、今まで懷いておつた強い自信を危く揺がせようとしたのであつたが、同じ七日の城攻めの功名によつて傷ついた自信は、名残りなく償われたばかりでなく、一番乗りの功を収めて、越前勢の武名惣軍を圧するに至つたのであるから、自分が家臣の誰人よりも

秀れているという忠直卿の自信が、今ではもっと拡大して、自分は城攻めに備わった六十諸侯の何人なんびとよりも秀れているという自信に移りかけていた。大坂陣を通じて三千七百五十級しるしの首級を挙げ、しかも城将左衛門尉幸村の首級を挙げたものは、忠直卿の軍勢に相違なかったのだ。

忠直卿は初花の茶入と、日本燐燐という美称とを、自分が何人よりも秀れたる人間であるという証券として心のうちに銘じた。

晴々とした心持であった。そこに並んでいる大名小名百二十名は、ことごとく忠直卿に賛美の瞳を向けているように思われた。

彼は今まで自分の臣下の何人よりも、自分が優秀な人間であることを誇りとしていた。が、比んでいる相手はことごとく自分の臣下であることが物足らなかった。然るに、今は天下の諸侯の何人よりも真つ先に、大御所から手を取って歓待を受けている。

自分には伯父に当る義直卿も頼宣卿も、何の功名をも挙げていない。まして同じく伯父に当る越後侍従忠輝ただてる卿は、七日の合戦の手に合わず散々の不首尾である。伊達、前田、黒田という聞えた大藩の勲功も、越前家の功名の前には月の前の螢火よりもまだ弱い。

こう考えると、忠直卿は家康の過ぐる日の叱責によって、一旦傷つけられようとした他

人に対する優越感が、見事に回復されたばかりでなく、一旦傷つけられただけにその反動として、回復されたそれは以前のものよりも、もっと輝かしい力強いものであった。

こうして越前少将忠直卿は、天下第一人といったような誇りを持ちながら、その年八月、都を辞して揚々とした心持で、居城越前の福井へ下った。

二

越前北の庄の城の大広間に、いま銀燭は眩まばゆいばかりに数限りもなく燃えさかっている。

その白蟻が解けて流れて、蟻受けの上にうずたかく溜ためっているのを見れば、よほど酒宴の刻ときが移うつっているであろう。

忠直卿は国に就かれて以来、昼間は家中の若武士を集めて弓馬槍劍といったような武術の大仕合を催し、夜は彼らをそのままに引き止めて、一大無礼講の酒宴を開くのを常とした。

忠直卿は、祖父の家康から日本はんかい燗あかと媚こびられた名が、心を溶かすように嬉しくて堪たまらなかつた。彼は家中の若武士ざむらいと槍を合あわし、劍を交かじえ、彼らを散々に打ち負かすこ

とによつて、自分の誇りを養う日々の糧かてとしていたのであつた。

今も、忠直卿を上座として、一段下つた広間に大きい円形を描いている若武士は、数多い家中の若者の中から選ばれた武芸の達者であつた。まだ前髪のある少年も打ち交じつていたが、いずれも筋骨逞しく、澁刺たる瞳を持つてゐる。

が、城主の忠直卿の風貌は、彼らよりも一段秀れて颯爽たるものであつた。やや肉落ちて瀟洒しょうしゃたる姿ではあるが、その炯々けいけいたる瞳はほとんど怪しきまでに鋭い力を放つて、精悍の氣眉宇の間に溢れて見えた。

忠直卿は、今微酔の回りかけている目を開いて、一座をずうつと見回された。

そこに居並んでいる百に余る成年は、皆自分の意志によつては、水火をも辞さない人々であることを思うと、彼は心の内からこみ上げて来る、権力者に特有な誇りを感じずにはいなかった。

が、彼の今宵の誇りはそれだけには止まつていなかった。彼は武士としての実力においても、ここに集つてゐるすべての青年に打ち勝つたということが、彼の誇りを二重のものにしてしまつた。

彼は今日もまた、家臣を集めて槍術の大仕合を催した。それは家中から槍術に秀れた青

年を集めて、それを二組に分けた紅白の大仕合であつた。

そして、彼自ら紅軍に大将として出場したのである。仕合の形勢は、始終紅軍の方が不利であつた。出る者も、出る者も、敵のためにばたばたと倒されて、紅軍の副将が倒れた時には、白軍にはなお五人の不戦者があつた。

その時に、紅軍の大將たる忠直卿は、自ら三間柄の大神の槍をりゅうりゅうと扱しごいて、勇氣凜然と出場した。まことに山の動くがごとき勢いであつた。白軍の戰士は見る見るうちに威圧された。最初に出た小姓頭の男はかねがね忠直卿の猛勇を恐れているだけに、槍を合わすか合わさぬかに、早くも持つていた槍を巻き落されて、脾腹ひばらの辺を突かれると、悶絶せんばかりにへたばつてしまった。続く馬回りの男とお納戸なんど役の男も、一溜りもなく突き伏せられてしまった。が、白軍の副将の おおしまさだゆう大島左太夫という男は、指南番大島左膳の嫡子であつて、槍を取つては家中無双の名誉を持つていた。

「殿のお勢いも、左太夫にはちと難しかろう」という囁きが、いずこともなく起こつた。が、激しく七、八合槍を合わせたかを見ると、左太夫は、したたかに腰の辺を一突き突かれて、よろめく所をつけ入つた忠直卿のために、再び真正面から胸の急所を突かれていた。見物席にいた家中一統は、思う存分に喝采した。忠直卿は、やや息のはずまれるのを制し

ながら、静かに相手の大将の出るのを待った。心のうちは、いつものように得意の絶頂であつた。

白軍の大将は小野田右近おのだうこんといつた。十二の年から京における槍術の名人権藤左門ごんどうさもんに入つて、二十の年には、師の左門にさえ突き勝つほどの修練を得ていた。が、忠直卿は何物をも恐れない。「えい！」と鋭く声を掛けられると、猛然として突き掛つた。ただ技術の力というよりも、そこには六十七万石の国主の勢いさえ加わるごとく見えた。二十合にも近い激しい戦いが続いたかと思うと、右近は右の肩先に忠直卿の激しい一突きを受けて、一間ばかり退くと、

「参りました」と、平伏してしまつた。

見物席の人々は、北の庄の城の崩るるばかりに喝采した。忠直卿は得意の絶頂にあつた。上席に帰ると、彼は声を揚げて、

「皆の者大儀じゃ。いでこれから慰勞の酒宴を開くといたそうぞ」と、叫んだのであつた。彼は近頃でない上機嫌であつた。酒宴の進むにつれ、寵臣は代る代る彼の前に進んだ。

「殿！ 大坂陣で矢石しせきの間を往来せられまして以来は、また一段と御上達遊ばされましたな。我らごときは、もはや殿のお相手は仕りかねます」と申し上げた。大坂陣の話をさえ

すれば、忠直卿は他愛もなく機嫌がよかつた。

が、忠直卿もいたく酔つてしまつた。一座を見ると、正体もなく酔い潰れている者が大分多くなっている。管をまく者もある、小声で隆達節りゅうたつぶしを唄っている者もある。酒宴の興は、ほとんど尽きかけている。

忠直卿はふと奥殿みなぎに漲みなぎっている異性のことを思い出すと、男ばかりの酒宴が殺風景に思われて来た。彼はつと立つて、

「皆の者許せ！」といい捨てたまま座を立つた。さすがに酔い潰れた者も、居住いを正して平伏した。今まで眠りかけていた小姓たちは、はつと目をさまして主君の後を追つた。

忠直卿が、奥殿へ続く長廊下へ出ると、冷たい初秋の風が頬に快かつた。見ると、外は十日ばかりの薄月夜で、萩の花がほの白く咲きこぼれている辺から、虫の声さえ聞えて来る。

忠直卿は、庭へ下りてみたくなつた。奥殿からの迎いの侍女たちを帰して、小姓を一人連れたまま、庭に下り立つた。庭の面には、夜露がしつとりと降りている。微かな月光が、城下の街を玲瓏れいろうと澄み渡る夜の大気のうちに、墨絵のごとく浮ばせている。

忠直卿は、久し振りにこうした静寂の境に身を置くことを欣よろこんだ。天地は寂然じゃくねんとし

て静かである。ただ彼が見捨ててきた城中の大広間からは、雑然たる饗宴の叫びが洩れてくる。それも彼が座を立つてからは、一段と酒席が乱れたとみえ、吾妻拳を打つ掛声まで交つて聞える。が、それもよほどの間隔があるので、そううるさくは耳に響いて来ない。

忠直卿は萩の中の小道を伝い、泉水の縁を回つて小高い丘に在るあずまや四阿へと入った。そこからは信越の山々が、微かな月の光を含んでいる空気の中に、おぼろ朧に浮いて見える。忠直卿は、今までの大名生活においてまだ経験したことのないような感傷的な心持にとらわれて、思わずそこに小半刻を過した。

すると、ふと人声が聞える。今まで寂然として、虫の声のみが淋しかった所に人声が聞え出した。声の様子でみると、二人の人間が話しながら、四阿の方へ近づいてくるらしい。忠直卿は、今自分が享受している静寂な心持が、不意の侵入者によつて掻き乱されるのが厭であつた。

しかし、小姓をして、近寄つて来る人間を追わしむるほど、今宵の彼の心は荒すさんではいなかった。二人は話しながら、だんだん近づいて来る。四阿のうちへは月の光が射さぬので、そこに彼らの主君がいようとは、夢にも気付いていないらしい。

忠直卿は、その二人が誰であるか、見極めようとは思つていなかった。が、二人の声が

だんだん近づいて来ると、それが誰と誰とであるかが自然と分かって来た。やや潰れたような声の方は、今日の大仕合に白軍の大將を務めた小野田右近である。甲高い上ずった声の方は、今日忠直卿に一氣に突き伏せられた白軍の副大將、大島左太夫である。二人はさつきから、なんでも今日の紅白仕合について話しているらしい。

忠直卿は、大名として生れて初めて、立聞きをするという不思議な興味を覚えて、思わず注意を、その方へ集中させた。

二人は、四阿からは三間とは離れない泉水の汀^{みぎわ}で、立ち止まっているらしい。左太夫は、心持声を潜めたらしく、

「時に、殿のお腕前をどう思う？」と、きいた。右近が、苦笑をしたらしい気配がした。

「殿のお噂か！ 聞えたら切腹物じやのう」

「陰では公方^{くほう}のお噂もする。どうじゃ、殿のお腕前は？ 真実のお力量は？」と、左太夫は、かなり真剣にきいて、じつと息を凝^こらして、右近の評価を待っているようであった。

「さればじやのう！ いかい御上達じや」といったまま、右近は言葉を切った。忠直卿は、初めて臣下の偽らざる賞賛を聞いたように覺えた。が、右近はもつと言葉を続けた。

「以前ほど、勝ちをお譲りいたすのに、骨が折れなくなつたわ」

二人の若武士は、そこで顔を見合せて会心の苦笑をしたらしい気配がした。

右近の言葉を聞いた忠直卿の心の中に、そこに突如として感情の大渦巻が声を立てて流れはじめたは無論である。

忠直卿は、生れて初めて、土足をもつて頭上から踏み躪^{にじ}られたような心持がした。彼の唇はブルブルと顫え、惣身の血潮が煮えくり返つて、ぐんぐん頭へ逆上するように思つた。右近の一言によつて、彼は今まで自分が立つておつた人間として最高の脚台から、引きずり下ろされて地上へ投げ出されたような、名状し難い衝^{シヨック}動を受けた。

それは、確かに激怒に近い感情であつた。しかし、心の中で有り余つた力が外にはみ出したような激怒とは、まったく違つたものであつた。その激怒は、外面はさかんに燃え狂つているものの、中核のところには、癒しがたい淋しさの空虚が忽然と作られている激怒であつた。彼は世の中が急に頼りなくなつたような、今までのすべての生活、自分の持つていたすべての誇りが、ことごとく偽りの土台の上に立つていたことに気がついたような淋しさに、ひしひしと襲^はわれていた。

彼は小姓の持つている佩^{はい}刀^{とう}を取つて、即座に兩人を切つて捨てようかと意気込んだが、そうした激しい意志を遂げる強い力は、この時の彼の心のうちには少しも残つてはいな

った。

その上、主君として臣下から偽りの勝利を媚びられて得意になっていた自分が浅ましいと同時に、今兩人を手刃^{しゅじん}して、その浅ましい事実を自分が知っているということを家中の者に知らせるのも、彼にとつてはかなりの苦痛であつた。忠直卿は、胸の内に湧き返る感情をじつと抑えて、いかなる行動に出ずるのが、いちばん適當であるかを考えた。余りに不用意にこうした経験に出合したため、たださえ興奮しやすい忠直卿の感情は、收拾のつかぬほど混乱した。

忠直卿のそばに、さつきから置物のようにじつとして蹲^{うずくま}っていた聰明な小姓は、さすがにこの危機を十分に知っていた。二人の男に、ここに彼らの主君がいることを教えねば、どんな大事が起るかも知れぬと思つた。彼は、主君の凄まじい顔色を窺いながら、二、三度小さい咳をした。

小姓の小さい咳は、この場合はなほだ有効であつた。右近と左太夫とは、付近に人がいるのを知ると、はつとしてその冒^{ぼう}流^{りゅう}な口をつぐんだ。

二人はいい合はしたように、足早く大広間の方へと去つてしまった。

忠直卿の瞳は、怒りに燃えていた。が、その頬は凄まじいまでに蒼ざめている。

彼の少年時代からの感情生活は、右近の一言によって、物の見事に破産してしまっていた。彼が幼にして、遊戯をすれば近習の誰よりも巧みであったことや、破魔弓はまゆみの的を競えば近習の何人なんびとよりも命中矢あたりやを出したことや、習字の稽古の筆を取れば、祐筆の老人が膝頭を叩いて彼の手跡を賞賛したことなどが、皆不快な記憶として彼の頭に一時に蘇よみがつて来た。

武術の方面においても、そうであった。劍を取っても、槍を取っても、たちまち相手をする若武士に打ち勝つほどの腕に瞬く間に上達した。彼は今まで自分を信じて来た。自分の実力を飽くまで信じて来た。今右近らの冒流な陰口を耳にしても、それが彼らの負け惜しみであるときえ、ともすれば思うほどである。

しかし、今日の右近の言葉は、その言葉が発せられた時と場合とを考えれば、決して冗談でもなければ嘘でもなかった。

自信にみちていた忠直卿の耳にも、正真の事実として聞えぬわけには行かなかった。

右近の言葉は、彼の耳じ朶だのうちに彫り付けられたように残っている。

考えてみると、忠直卿は今日の華々しい勝利の中でも、どこまでが本当で、どこからが嘘だか分からなくなった。否、今日のみではない、生れて以来幾度も試みた遊戯や仕合で、

自分が占めた数限りのない勝利や優越の中で、どれだけが本物でどれだけが嘘のものか分からなくなった。そう考えると、彼は心の中を掻きむしられるような、激しい焦燥を感じた。彼とても、臣下のすべてから偽りの勝利を奪っているのではない。否、その多くの者には正當に勝っているのだ。それだのに右近や左太夫などの不埒者ふらちもののいるために、自分の勝利が、すべて不純の色彩を帯びるに至ったのだと思うと、彼は今右近と左太夫とに対し、旺然たる憎惡を感じ始めたのである。

が、そればかりではなかった。こうなると、つい三月ばかり前に、大坂の戦場に立てた偉勲さえ、なんだか怪しげな正体の分からぬもののように、忠直卿の心の中に思われた。彼が、今まで誇りとしていた日本樊噲はんたいという称呼さえ、なんだか人をばかにしたような、誇張を伴うているようにさえ思われ出した。家臣どもから、いい加減に扱われていた自分は、お祖父様から手輕に操られているのではないかと思うと、忠直卿の瞳には、初めて不覺の涙が滲み始めた。

無礼講の酒宴にぐたぐたに酔つてしまつた若武士たちは、九つのお土圭とけいが鳴るのを合図に総立ちになつて退出しようとする、急にお傍用人が奥殿から駆けつけて来た。

「各々方、静まれい！ 殿の仰せらるるには、明日は犬追物のお催しがあるべきはずのところ、急に御変改があつて、明日も、今日同様、槍術の大仕合いを催せらるる、時刻と番組とはすべて今日に変わぬとの仰せじや」と、双手を挙げて、大声に触れ回つた。

若武士の中には「やれやれ明日もか」と思う者もあつた。今日の勝利をもう一度繰返すのかと、北叟ほくそえ笑む者もあつた。多くの者は、酒を飲んだ後の勇ましい元気で、

「毎日続こうとも結構じや。明日もまたお振舞酒に思い切り酔うことができる」と、勇み立つた。

その翌日は、昨日と等しく、城中の兵法座敷が美しく掃き浄められて、紅白の幔幕まんまくが張り渡され、上座には忠直卿が昨日と同様に座を占めたが、始終下唇を噛むばかりでなく、瞳が爛々として燃えていた。

勝負は、昨日とほとんど同様な情勢で進展した。が、昨日の勝敗が皆の心にまざまざと残っている、組合せの多くは一方にとっては雪辱戦であつたから、掛け声は昨日にもまして激しかった。

紅軍は、昨日よりもさらに旗色が悪かった。大将の忠直卿が出られた時には、白軍には大将、副将をはじめ、六人の不戦者があつた。

見物の家中の者どもが不思議に思うほど、忠直卿は興奮していた。タンポの付いた大身の槍を、熱に浮された男のようにみだりに打ち振った。最初の二人は腫れ物にでも触るように、^{きようきよう}恟々として立ち向つた。が、主君の激しい槍先にたちまちに突き^{すく}疎められて平伏してしまう。次の二人も、主君の凄まじい気配に怖じ恐れて、ただ型ばかりに槍を振つただけであつた。

五人目に現れたのは、大島左太夫であつた。彼は今日の忠直卿の常軌を逸したとも思われる振舞いについて、微かながら杞憂^{きゆう}を懷く一人であつた。無論、彼は自分の主君が、自分たちの昨夜の立話を立聞きした当の本人であろうとは、夢にも思っていなかつた。が、昨夜、夜更けの庭に耳にした咳払の主が、主君に自分たちを^{さん}讒したのではあるまいかという微かな懸念は持っていた。彼は常よりも更に肅然として、主君の前に頭を下げた。

「左太夫か！」と、忠直卿はある落ち着きを、示そうと努めたらしいが、その声は妙に上ずっていた。

「左太夫！ 槍といい剣といい、正真の腕前は真槍真剣でなければ分らない！ タンポ

の付いた稽古槍の仕合は、所詮は偽りの仕合じや。負けても傷が付かぬとなれば、仕儀によつては、負けても差支えがないわけとなる！ 忠直は偽りの仕合にはもう飽いている。大坂表において手馴れた真槍をもつて立ち向うほどに、そちも真槍をもつて来い！ 主と思うに及ばぬ。隙があらば遠慮いたさずに突け！」

忠直卿は上ずつて、言葉の末が震えた。左太夫は色を変えた。左太夫の後に控えている小野田右近も、左太夫と同じく色を変えた。

が、見物席にいる家中の者は、忠直卿の心のうちを解するに苦しんだ。殿御狂気と怖気おしげをふるうものが多かった。忠直卿は、これまでは癩癖こそあったが、平常、至極闊達であり、やや粗暴のきらいこそあったが、非道無残な振舞いは寸毫もなかったので、今日の忠直卿の振舞いを見て、家中の者が色を変じたのも無理ではなかった。

が、忠直卿が今日真槍を手にしたのは、左太夫、右近に対する消し難い憎しみから出たとはいえ、一つには自分の正真の腕前を知りたいという希望もあった。真槍で立ち向うならば、彼らも無下に負けはしまい、秘術を尽くして立ち向うに違いない。さすれば自分の真の力量も分かる。もしそのために、自分が手を負うことがあっても、偽りの勝利に狂喜しているよりも、どれほど気持がよいか知れぬと、心のうちで思った。

「それ！ 真槍の用意いたせ」と、忠直卿が命ずると、かねて用意してあったのだろう、小姓が二人、各々一本の大身の槍を重たそうにもたげて、忠直卿主従の間に持ち出した。「それ！ 左太夫用意せい！」といいながら、忠直卿は手馴れた三間柄の長槍の穂鞘を払った。

槍鍛冶の名手、備後貞包びんごさだかねの鍛えた七寸に近い鋒先から迸ほとばしる殺気が、一座の人々の心を冷たく圧した。

今まで、じつとして主君忠直の振舞いを看過していた国老の本多土佐は、主君が鋒先を払われるや否や突如として忠直卿の御前に出た。

「殿！ お氣が狂わせられたか。大切の御身をもつて、みだりに劍戟けんげきを弄もてあそばれ家臣の者を傷つけられては、公儀に聞えても容易ならぬ儀でござる。平にお止り下されい」と、老眼をしばたたきながら、必死になつて申し上げた。

「爺か！ 止めだて無用じや。今日の真槍の仕合は、忠直六十七万石の家国に易かえてもと、思い立つた一儀じや。止めだて一切無用じや」と、忠直卿は凜然といひ放った。そこには秋霜のごとく犯しがたき威厳が伴った。こうした場合、これまでも忠直卿の意志は絶対のものであった。土佐は口を緘つぐんだまま、悄然として引き退いた。

左太夫は、もう先刻から十分に覚悟をしていた。昨夜の立話たちわが殿のお耳に入つたための御成敗かと思えば、彼にはなんとも文句のいいようはなかった。それは家来として当然受くべき成敗であつた。それを、かかる真槍仕合にかこつけての成敗かと思えば、彼はそこに忠直卿の好意をさえ感ずるように思つた。彼は主君の真槍に貫かれて潔く死にたいと思つた。

「左太夫、いかにも真槍をもつて、お相手をいたしまする」と、思い切つていつた。見物席に左太夫の不遜に対する叱責しせの声が洩れた。忠直卿は苦笑した。

「それでこそ、忠直の家臣じや。主と思うな。隙があれば、遠慮いたさず突け！」
こういいながら、忠直卿は槍しんを扱しいて二、三間後へ退りながら、位を取られた。

左太夫も、真槍の鞘しやを払い、

「御免！」と叫びながら主君に立ち向つた。

一座の者は、凄まじい殺氣に閉じられて、身の毛もよだち、息を詰めて、ただ茫然と主従の決闘を見守るばかりであつた。

忠直卿は、自分の本当の力量を如実にさえ知ることができれば、思い残すことはないと思え、思い込んでいた。従つて国主という自覚もなく、相手が臣下であるという考えもな

く、ただ勇氣凜然として立ち向われた。

が、左太夫は、最初から覺悟をきめていた。三合ばかり槍を合すと、彼は忠直卿の槍を左の高股に受けて、どうと地響き打たせて、のけ様に倒れた。

見物席の人々は一斉に深い溜息を洩した。左太夫の傷ついた身体は、同僚の誰彼によってたちまち運び去られた。

が、忠直卿の心には、勝利の快感は少しもなかった。左太夫の負けが、昨日と同じく意識しての負けであることが、まざまざと分かったので、忠直卿の心は昨夜にもまして淋しかった。左太夫めは、命を賭してまで、偽りの勝利を主君にくらわせているのだと思うと、忠直卿の心の焦躁と淋しさと頼りなさは、さらに底深く植えつけられた。忠直卿は、自分の身を危険に置いても、臣下の身体を犠牲にしても、なお本当のことが知りがたい自分の身を恨んだ。

左太夫が倒れると、右近は少しも悪^{わる}怯^ひれた様子もなく、蒼白な顔に覺悟の瞳を輝かしながら、左太夫の取り落した槍^{ひっさ}を携^ひけてそこに立った。

忠直卿は、右近め、昨夜あのように、思いきった言葉を吐いた男であるから、必死の手向いをするに相違ないと、消えかかろうとする勇氣を鼓^こして立ち向かった。

が、この男も左太夫と同じく、自分の罪を深く心のうちに感じていた。そして、潔く主君の長槍に貫かれて、自分の罪を謝そうとしていた。

忠直卿は、五、六合立ち合っているうちに、相手の右近が、急所というべき胸の辺へ、幾度も隙を作るのを見た。この男も、自分の命を捨ててまで主君を欺き終ろうとしているのだと思うと、忠直卿は不快な淋しさに襲われて来た。そして、相手にうまうまと乗せられて勝利を得るのが、ばかばかしくなつて来た。

が、右近は一刻も早く主君の槍先に貫かれないと思つたらしく、忠直卿が突き出す槍先に、故意に身を当てるようにして、右の肩口をぐさと貫かれてしまった。

忠直卿は、見事に昨夜の鬱憤を晴らした。が、それは彼の心に、新しい淋しさを植えつけたに過ぎなかった。左太夫も右近も、自分の命を賭してまで、彼らの嘘を守ってしまったことである。

忠直卿は、その夜遅く、傷のまま自分の屋敷に運ばれた右近と左太夫との二人が、時刻を前後して腹を割いて死んだという知らせを聞いて、暗然たる心持にならずにはいられなかった。

忠直卿は、つくづく考えた。自分と彼らとの間には、虚偽の膜がかかっている。その膜

を、その偽りの膜を彼らは必死になつて支えているのだ。その偽りは、浮ついた偽りでなく、必死の懸命の偽りである。忠直卿は、今日真槍をもつて、その偽りの膜を必死になつて突き破ろうとしたのだが、その破れは、彼らの血によつてたちまち修繕されてしまった。自分と家来との間には、依然としてその膜がかかつている。その膜の向うでは、人間が人間らしく本当に交際つきあつてゐる。が、彼らが一旦自分に向うとなると、皆その膜を頭から被かぶつてゐる。忠直卿は自分一人、膜のこちらに取り残されてゐることを思い出すと、苛いら々々淋しさが猛然として自分の心身を襲つて来るのをおぼえた。

四

真槍の仕合があつて以来、殿の御癩癰ごかんべきが募つたという警報が、一城の人心をして、忠直卿に対して恟きよう々々たらしめた。殿の御前だというと、小姓たちは瞳を据え息を凝らして、微動さえおろそかにはしなかつた。近習の者も、一足進み一足退くにも儀礼を正しうして、微瑕びかだに犯さぬことを念とした。君臣の間に多少は存在していた心安さが跡を滅して、君前には肅殺たる気が漂つた。家臣たちは君前から退くと、今までにない心身の疲

勞を覺えた。

しかし、君臣の間がこうして荒み始めようとするのに気がついたのは、決して家来の方ばかりではなかった。忠直卿は、ある日近習の一人が、自分に家老たちからの書状を捧げるとて、四、五段の彼方からいざり寄ろうとするのを見て、

「ずっと遠慮いたさず前へ出よ！ さような礼儀には及ばぬぞ」といった。が、それは好意から出た注意というよりも、焦燥から出た叱責に近かった。侍臣は、主君の言葉によって、元の心安さに帰ろうとした。が、そうした意識を伴った心安さの奥には、ごつごつとした骨があった。

真槍の仕合以来、忠直卿は忘れたかのように、武術の稽古から身を遠ざけた。毎日日課のように続けていた武術仕合を中止したばかりでなく、木刀を取り、稽古槍を手にするこゝとさえなくなった。

威張つてはいたが寛闊で、乱暴ではあったが無邪気な青年君主であった忠直卿は、ふつりと木刀や半弓を手にしなくなつた代りに、酒杯を手にする日が多くなつた。少年時代から豪酒の素質を持っていたが、酒に淫することなどは、決してなかったのが、今では大杯をしきりに傾けて、乱酒の萌きざしがようやく現れた。

ある夜の酒宴の席であつた。忠直卿の機嫌がいつになく晴々しかった。すると、彼にとつては第一の寵臣である ますだかんのすけ 増田勘之介 という小姓が、彼の大杯になみなみと酌をしながら、「殿には、何故この頃兵法座敷には渡らされませぬか。先頃のお手柄にちと御慢心遊ばして、御怠慢とお見受け申します」といった。彼は、こういうことによつて、主君に対する親しみを十分見せたつもりであつた。

すると、思いがけもなく、忠直卿の顔は急に色を変じた。つと、そばにあつた杯盤を、取るよりも早く、勘之介の面上を目がけて発矢 はつし とばかりに投げ付けた。主君から、予期せざる暴行を受けて、勘之介ははつと色を変じたが、忠義一途の彼は、決して身体をかわさなかつた。彼はその杯盤を真向に受けて、白い面から血を流しながら、その場に平伏した。忠直卿は、物をもいわず立ち上ると、そのまま奥殿へ入ってしまった。同僚の誰彼が駆け寄つて慰めながら、勘之介を引き起こした。

勘之介は、その日、病 やまい と称して宿へ下つたが、その夜の明けるを待たず切腹した。

忠直卿は、それを聞くと、ただ淋しく苦笑したばかりであつた。

そのことがあつてから、十日ばかりも経つた頃だつた。忠直卿は、老家老の小山丹後 たんご と碁を囲んでいた。老人と忠直卿とは、相碁であつた。が、二、三年来、老人はだんだん負

け越すことが多かった。その日も、丹後は忠直卿のために、三回ばかり続けざまに敗れた。すると、老人は人の好きそうな微笑を示しながら、

「殿は近頃、いかい御上達じや。老人ではとてもお相手になり申さぬわ」といった。

と、今まで晴れやかに続けざまの快勝を享樂していたらしい忠直卿の面を、暗鬱の陰影が掠^{かす}めたかと思うと、彼はいきなり立ち上って、二人の間に置かれている碁盤を足蹴にした。盤上に並んでいた黒白の石は跳び散って、その二、三は丹後の顔を打った。

丹後は勝負に勝ちながら、怒り出した主君の心を解するに苦しんだ。彼は、咄嗟に立ち去ろうとする忠直卿の袴の裾を捕えながら、

「いかが遊ばされた！ 殿には御乱心か。どのような御趣意あつて、丹後めにかような恥辱を与えらるる？」と、狂気のごとくに叫んだ。一徹な老人の心には、忠直卿の不当な仕打ちに対する怒りが、炎の如く燃えた。

が、忠直卿は、老人の怒りを少しも介意せず、「えい！」と袴を捕えた手を振り放しながら、つつと奥へ去ってしまった。

老人は、幼年時代から手塩にかけて守り育てた主君から、理不尽な辱しめを受け、老の目に涙を流しながら、口惜しがった。彼は、故中納言秀康卿が、ありし世の寛仁大度な行

跡を思い起しながら、永らえて恥を得た身を悔いた。正直な丹後は、盤面に向つて追ついで従ううけをするような卑劣な心は、毛頭持つていなかった。

が、もう忠直卿の心には、家臣の一举一動は、すべて一色にしか映らなくなっていた。

老人は、その日家へ帰ると、式服を着て礼を正し、皺腹をかき切つて、惜しからぬ身を捨ててしまった。

忠直卿御乱行という噂が、ようやく封境ほうきやうの内外に伝わるようになった。

勝氣の忠直卿は、これまでは、他人に対する優越感を享受するために、よく勝負事を試みたが、このことがあつて以来は、その方面にも、ふつとりと手を出さなくなった。

こうなると、忠直卿の生活がだんだん荒すさんで行くのも無理はなかった。城中にあつては、なすことのないままに酒食に耽いり、色いろを漁うつた。そして、城外に出ては、狩獵にのみ日を暮した。野に鳥を追ひ、山に獣を狩り立てた。さすがに鳥獣は、国主の出獵であるがために、忠直卿の矢面やおもてに好んで飛び出すものはなかった。人間の世界から離れ、こうした自然界に対する時、忠直卿は自分を囲う偽りの膜から身を脱出し得たように、すがすがしい心持がした。

五

これまでの忠直卿は、国老たちのいうことは、何かにつけてよく聞かれた。まだ長吉丸といつていた十三歳の昔、父秀康卿の臨終の床に呼ばれて、「父の亡からん後は、国老どもの申すことを父が申すことと心得てよく聞かれよ」と諭さとされたことを、大事に守つていた。

が、この頃の彼は、国政を聞く時にも、すべてを僻ひがんで解釈した。家老たちが、ある男を推薦して褒め立てると、彼はその男が食わせ者のように思われて、その男を用うことを、意地にかかつて拒んだ。国老たちが、ある男の行跡の非難を申し上げて、閉門の至当であることを主張すると、忠直卿は、その男が硬直な士であるように思われて、いつかな閉門を命ずることを許さなかった。

越前領一帯、その年は近年希な凶作で、百姓の困苦一方ではなかった。家老たちは、袖を連ねて忠直卿の御前に出いで、年貢米の一部免除を願いい出いでた。が、忠直卿は、家老たちが口を酸すっぱくして説けば説くほど、家老たちの建言を採用するのが厭いやになった。彼自身、心のうちでは百姓に相当な同情を懐きながら、家老たちのいいままになるのが不快であつ

た。そして、家老たちがくどくどと説くのを聞き流しながら、

「ならぬ！　ならぬと申せば、しかと相ならぬぞ」と、怒鳴りつけた。なんのために拒んだのか、彼自身にさえ分からなかった。

こうした感情の食い違いが、主従の間に深くなるにつれ、国政日に荒^{すき}んで、越前侯乱行の噂は江戸の柳^{りゅうえい} 営にさえ達した。

が、忠直卿のかかる心持は、彼のもっと根本的な生活の方へも、だんだん食い入って行った。

ある夜のことであつた。彼は宵から奥殿にたて籠つて、愛妾たちを前にしながら、しきりに大杯を重ねていた。

京からはるばると召し下した絹野という美女が、この頃の忠直卿の寵幸を身一つにあつめていた。

忠直卿は、その夜は暮れて間もない六つ半刻から九つに近い深更まで、酒を飲み続けている。が、酒を飲まぬ愛妾たちは、彼の杯に酒を注ぐという単調な仕事を、幾回となく繰り返しているだけである。

忠直卿は、ふと酔眼をみひらいて、彼に侍座している愛妾の絹野を見た。ところが、その女は連夜の酒宴に疲れはてたのだろう。主君の御前ということもつい失念してしまったと見え、その二重瞼の美しい目を半眼に閉じながら、うつらうつらと仮睡に落ちようとしている。

じつと、その面を見ていると、忠直卿は、また更に新しい疑惑に囚われてしまった。ただ、主君という絶大な権力者のために身を委して、朝暮^{あけくれ}自分の意志を少しも働かさず、ただ傀儡^{かいらい}のように扱われている女の淋しさが、その不覚な仮睡のうちにまざまざと現れているように思われた。

忠直卿は思った。この女も、自分に愛があるというわけでは少しもないのだ。この女の嬌^{えんぜん}然たる姿態や、妖艶な媚は皆上部^{うわべ}ばかりの技巧なのだ。ただ、大金で退引^{のつびき}ならず身を購^{あがな}われ、国主という大権力者の前に引き据えられて是非もなく、できるだけその権力者の歓心を得ようという、切羽詰まった最後の逃げ道に過ぎないのだ。

が、この女が自分を愛していないばかりでなく、今まで自分を心から愛した女が一人でもあったらどうかと、忠直卿は考えた。

彼は今まで、人間同士の人情を少しも味わわずに来たことに、この頃ようやく気がつき

始めた。

彼は、友人同士の情を、味わったことさえなかった。幼年時代から、同年輩の小姓を自分の周囲に幾人となく見出した。が、彼らは忠直卿と友人として交わったのではない。ただ服従をしただけである。忠直卿は、彼らを愛した。が、彼らは決してその主君を愛し返しはしなかった。ただ義務感情から服従しただけである。

友情はともかく、異性との愛は、どうであつただろう、彼は、少年時代から、美しい女性を幾人となく自分の周囲に支配した。忠直卿は彼らを愛した。が、彼らの中の何人が彼を愛し返しただろう。忠直卿が愛しても、彼らは愛し返さなかった。ただ、唯々として服従を提供しただけである。彼は、今も自分の周囲に多くの人間を支配している。が、彼らは忠直卿に対して、人間としての人情の代りに、服従を提供しているだけである。

考えてみると、忠直卿は恋愛の代用としても服従を受け、友情の代りにも服従を受け、親切の代りにも服従を受けていた。無論、その中には人情から動いている本当の恋愛もあり、友情もあり、純な親切もあつたかも知れなかった。が、忠直卿の今の心持から見れば、それが混沌として、一様に服従の二字によって掩おほわれて見える。

人情の世界から一段高い所に放り上げられ、大勢の臣下の中央にありながら、索莫たる

孤独を感じているのが、わが忠直卿であつた。

こうした意識が嵩ずるにつれ、彼の奥殿における生活は、砂を噛むように落莫たるものになつて来た。

彼は、今まで自分の愛した女の愛が不純であつたことが、もう見え透くように思われた。自分が、心を掛けるとどの女も、唯々諾々いいたくたくとして自分の心のままに従つた。が、それは自分を愛しているのではない、ただ臣下として、君主の前に義務を尽くしているのに過ぎなかつた。彼は、恋愛の代りに、義務や服従を喫するのに、飽き果ててしまつていた。彼の生活が荒むすさに従つて、彼は単なる傀儡かいらいであるような異性の代りに、もつと弾力のある女性を愛したいと思つた。彼を心から愛し返さなくてもいいから、せめては人間らしい反抗を示すような異性を愛したいと思つた。

そのために、彼は家中の高禄の士の娘を、後房へ連れて来させた。が、彼らも忠直卿のいうことを、殿の仰せとばかり、ただ不可抗力の命令のように、なんの反抗を示さずに忍従した。彼らは靈驗あらたかな神の前に捧げられた人身御供のように、純な犠牲的な感情をもつて忠直卿に対していた。忠直卿は、その女たちと相對していても、少しも淫蕩な心持にはなれなかつた。

彼の物足りなさは、なお続いた。彼は夫の定まっている女なら、少しは反抗もするだろうと思った。彼は、命じて許^{いいなずけ}婚の夫ある娘を物色した。が、そうした女も、忠直卿の予期とは反して、主君の意志を絶対のものにして、忠直卿を人間以上のものに祭り上げてしまった。

もうこの頃から、忠直卿の放埒^{ほうらつ}を非難する声が、家中の士の間にはえ起った。

が、忠直卿の乱行は、なお止まなかった。許婚の夫ある娘を得て、少しも慰まなかった彼は、さらに非道な所業を犯した。それは、家中の女房で艶名のあるものを私^{ひそか}に探らしめて、その中の三名を、不時に城中に召し寄せたまま、帰さなかったことである。

主君の御乱行ここに極まるとさえ、嘆くものがあつた。

夫からの数度の嘆願にかかわらず、女房は返されなかった。重臣は、人倫の道に悖^{もと}る所業として忠直卿を強^{きようかん}諫した。

が、忠直卿は、重臣が諫むれば諫むるほど、自分の所業に興味を覚ゆるに至った。

女房を奪われた三人の家臣のうち、二人まで忠直卿の非道な企ての真相を知ると、君臣の義もこれまでと思つたと見え、いい合わせたごとく、相續いて割腹した。

横目付からその届出があると、忠直卿は手にしていた杯を、ぐっと飲み干されてから、

微かな苦笑を洩されたまま、なんとも言葉はなかった。家中一同の同情は、きゆうぜん翕然として死んだ二人の武士の上に注がれた。「さすがは武士じゃ。見事な最期じゃ」と、褒めやす者さえあつた。が、人々はこの二人を死せしめた原因を、ただ不可抗力な天災だと考えていた。一種の避くべからざる運命のように思っていた。

二人が前後して死んでみると、家中の人々の興味は、妻を奪われながら、只一人生き残っているあさみずよしろう浅水与四郎の身に集っていた。

そして、妻を奪われながら、腹を得切らぬその男を、臆病者として非難するものさえあつた。

が、四、五日してから、その男は飄然として登城した、そして、忠直卿にお目通りを願いたいと目付まで申し出た。が、目付は、浅水与四郎をいろいろになだすか宥め賺そうとした。

「なんと申しても、相手は主君じゃ。お身が今、お目通りに出たら必定お手打ちじゃ。殿の御非道は、われひと我人共によく分かっている、がなんと申しても相手は主君じゃ」

が、与四郎は断然としていい放った。

「たといいいかなろうとも、お目通りを願うのじゃ。たとえ身は八劈きやつぎにされようとも、念ないことじゃ。是非お取次ぎ下されい」と、必死の色を示した。

目付は、仕方なく白書院に詰めている家老の一人へ、その嘆願を伝えた。それを聞いた老年の家老は、「与四郎めは、血迷うたと見えるな。主君の御無理は分かっていることじやが、この場合腹をかつ切つて死諫しかんを進めるのが、臣下としての本分じや。他の二人はよう心得ているに、与四郎めは女房を取られたので血迷うたと見える。かほどの不覚人とは思わなかったに」と囁いた。

家老は、なおブツブツと口小言をいいながら、小姓を呼んで、そのことを洩々ながら忠直卿の耳に伝えしめた。

すると、忠直卿は、思いのほかに機嫌斜めならずであつた。

「ははは、与四郎めが、参つたか。よくぞ参りおつた。すぐ通せ！ 目通り許すぞ」と、呼ばれたが、この頃絶えて見えなかつた晴れがましい微笑が、頬の辺に漂うた。

しばらくすると、忠直卿の目の前に、病犬のように呆ほうけた与四郎の姿が現れた。数日來の心労に疲れたと見え、色が蒼ざめて、顔中にどこことなく殺氣が漂っている。そして、その瞳の中には、二筋も三筋も血を引いている。

忠直卿は生來初めて、自分の目の前に、自分の家臣が本当の感情を隠さず、顔に現しているのを見た。

「与四郎か！ 近う進め！」と、忠直卿は温顔をもつてこういわれた。なんだか、自分が人間として他の人間に対しているように思つて、与四郎に対して、一種の懐しさをさえ覺えた。主従の境を隔つる膜が除かれて、ただ人間同士として、向い合つてゐるように思われた。

与四郎は、畳の上を三反ばかり滑り寄ると、地獄の底からでも、洩れるような呻き声を出した。

「殿！ 主従の道も、人倫の大道よりは小事でござるぞ。妻を奪われましたお恨み、かくのごとく申し上げまするぞ」と、いかと思つと、与四郎は飛燕のごとく身を躍らせて、忠直卿に飛びかかった。その右の手には、早くもあいくちヒ首が光つていた。が、与四郎は、軽捷な忠直卿にわけもなく利腕ききうでを取られて、そこに捻じ伏せられてしまった。近習の一人は、氣を利かせたつもりで、小姓の持つていた忠直卿の佩刀はいとうを彼に手渡そうとした。が、忠直卿はかえつてその男しりぞを斥けた。

「与四郎！ さすがに其方そちは武士じやのう」と、いいながら、忠直卿は取つていた与四郎の手を放した。与四郎は、ヒ首を持ったまま、面おもても揚げず、そこに平伏した。

「其方の女房も、さすがに命を召さるるとも、余が言葉に従わぬと申しおつた。余の家来

には珍しい者どもじや」と、いったまま、忠直卿は心から快げに 哄笑こうしょうした。

忠直卿は、与四郎の反抗によつて、二重の歡びを得ていた。一つは、一個の人間として、他人から恨まれ殺されんとすることによつて、初めて自分も人間の世界へ一步踏み入れることが許されたように覺えたことである。もう一つは、家中において、打物取つては俊捷第一の噂ある与四郎が必死の匕首を、物の見事に取り押えたことであつた。この勝負に、嘘いつわりや佯いつわりがあろうとは思えなかつた。彼は、久し振りに勝利の快感を、なんの疑惑なしに、楽しむことができた。忠直卿は、この頃から胸のうちに腐りついている鬱懷の一端が解け始めて、明かな光明を見たように思われた。

「ただこのままに、お手打ちを」と嘆願する与四郎は、なんのお咎めもなく下げられたばかりでなく、与四郎の妻も、即刻お暇を賜つた。

が、忠直卿のこの歡びも、決して長くは続かなかつた。

与四郎夫婦は、城中から下げられると、その夜、枕を並べて覺悟の自殺を遂げてしまつた、なんのために死んだのか、確かにはわからなかつたが、おそらく相伝の主君に刃やいばを向けたのを恥じたのと、かつは彼らの命を救つた忠直卿の寛仁大度に、感激したためであらう。

が、二人の死を聞いた忠直卿は、少しも歎ばなかった。与四郎が覚悟の自殺をしたところから考えると、彼が匕首をもつて忠直卿に迫ったのも、どうやら怪しくなつて来た。忠直卿に潔く手刃いさぎよしゆじんされんための手段に過ぎなかつたようにも思われた、もしそうだとすると、忠直卿が見事にその利腕を取つて捻じ倒したのも、紅白仕合に敵の大將を見事に破つていたのと、余り違つたわけのものではなかつた。そう考えると、忠直卿は再び暗澹たる絶望的な氣持に陥つてしまつた。

忠直卿の乱行が、その後益々進んだことは、歴史にある通りである。最後には、家臣をほしいままに手刃しゅじんするばかりでなく、無辜むこの良民を捕えて、これに凶刃を加えるに至つた。ことに口碑こうひに残る「石の俎まないた」の言い伝えは、百世の後なお人に面を背けさせるものである。が、忠直卿が、かかる残虐を敢てしたのは、多分臣下が忠直卿を人間扱いにしないので、忠直卿の方でも、おしまいに臣下を人間扱いにしなくなつたのかも知れない。

六

しかし、忠直卿の乱行も、無限には続かなかつた。放埒ほうらちがたび重なるにつれて、幕府

の執政たる土居 おおいのかみとしかつ 大炊頭利勝、本多 こうすけのすけまさすみ 上野介正純は、私に越前侯廢絶の策をめぐらした。が、剛強無双の上に、徳川家には嫡々たる忠直卿に、正面からことを計っては、いかなる大變をひき起すかも分からぬので、ついには、忠直卿の御生母なる清涼尼せいりょうにを越前へ送つて、將軍家の意をそれとなく忠直卿に伝えることにした。

忠直卿は、母君との絶えて久しき対面を欣よろこばれたが、改易かいえきの沙汰を思いのほかにしたや、すぐ聞き入れられ、六十七万石の封城を、弊履のごとく捨てられ、配所たる豊後国府内ぶんごのくにふないに赴かれた。途中、敦賀にて入道され、法名を一伯いぱくと付けられた。時に元和九年五月のことで、忠直卿は三十の年を越したばかりであつた。後に豊後府内から同国津守つのかみに移されて、台所料として幕府から一万石を給され、晩年をこともなく過し、慶安三年九月十日に薨こじた。享年五十六歳であつた。

忠直卿の晩年の生活については、なんらの史実も伝わっていない。ただ、忠直卿警護の任に當つていた府内の城主竹中 うぬめのしょうしげつぐ 采女正重次が、その家臣をして忠直卿の行状を録せしめて、幕席の執政たる土居大炊頭利勝に送つた「忠直卿行状記」の一冊があるばかりである。その一節に、

「忠直卿当国津守つのかみに移らせ給うて後は、些いささかの荒々しきお振舞もなく安けく暮され申候。

兼々^{かねがね}仰せられ候には、六十七万石の家国を失いつる折は、悪夢より覚めたらんが如く、ただすがすがしゅうこそ思い候え。生々世々、国主大名などに再びとは生れまじきぞ、多勢の中に交じりながら、孤独地獄にも陥ちたらんが如く苦艱^{くげん}を受くること屢々^{しばしば}なりなど仰せられ、御改易のことについては、些の御後悔だに見えさせられず候。……徒然^{つれづれ}の折には、村年寄僧侶などさえお手近く召し寄せられ、囲棋のお遊びなどあり、打ち興ぜさせたまう有様、殷^{いん}の紂^{ちゆう}王^{おう}にも勝れる暴君よなど、噂せられたまいし面影更に見え給わず。ことに津守の浄建^{じやうけん}寺の沆^{こう}山^{さん}老^{ろう}柄^{かう}とは、いと入^{じつ}懇^{こん}に渡らせられ、老柄が、『六十七万石も持たせたまえば、誰も紂王の真似などもいたしたくなるものぞ。殿の悪しきに非ず』など、聞え上げけるに、お怒りのようもなく笑わせ給う。末には百姓町人の賤しきをさえお目通りに引き給い、無礼^{なめげ}に飾なく申し上ぐることを、いと興がらせ給えり。御身はよろず、お慎み深く、近侍の者を憫み、領民を愛撫したまう有様、六十七万石の家国を失いたる無法人とも見えずと人々不審^{いふか}しく思うこと今に止まず候」と、あつた。

青空文庫情報

底本：「菊池寛 短編と戯曲」文芸春秋

1988（昭和63）年3月25日第1刷発行

入力：真先芳秋

校正：湯地光弘

1999年11月4日公開

2010年1月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

忠直卿行状記

菊池寛

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>